

2013 年度 主催シンポジウム 1

社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション

—新たなカリキュラム像の提案に向けて—

司会進行	齋藤兆史（学校教育高度化専攻長・教育内容開発コース）
センター長挨拶	小玉重夫（学校教育高度化センター長・基礎教育学コース）
研究科長挨拶	南風原朝和（教育学研究科長・教育心理学コース）
話題提供	市川伸一（教育心理学コース） 田中智志（基礎教育学コース） 小玉重夫（学校教育高度化センター長・基礎教育学コース） 村石幸正（附属中等教育学校）
指定討論	藤村宣之（教職開発コース） 両角亜希子（大学経営・政策コース）
まとめ・閉会挨拶	大桃敏行（附属中等教育学校長・学校開発政策コース）

日時 2013 年 12 月 8 日（日）

午後 1～5 時

会場 東京大学福武ホール ラーニングシアター

センター長挨拶

小玉 重夫

（学校教育高度化センター長・基礎教育学コース）

本日のシンポジウムのテーマは「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション—新たなカリキュラム像の提案に向けて—」です。私たち東京大学大学院学校教育高度化センターと東京大学大学院教育学研究科の教員が中心になって進めてきた3年間の共同研究も、本年度が3年目ということで、その成果の一端を報告させていただき、一緒に議論していくという内容のシンポジウムになっています。私たちが考えている新しいカリキュラム像の提案に向けての問題提起を聞いていただき、ぜひ活発なご意見を頂ければと思っています。

本日のシンポジウムを開催するに当たり、学校教育高度化センターの植阪助教、高橋学術支援職員をはじめ、学校教育高度化センターで現在行っ

ている院生プロジェクトの皆さんにも実行委員として関わってもらっています。この場をお借りして、お礼を申し上げたいと思います。

それでは、長時間になりますが、これからじっくりと議論を進めていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

研究科長挨拶

南風原 朝和

（教育学研究科長・教育心理学コース）

本日は多くの方にお集まりいただき、ありがとうございます。小玉センター長からもお話がありましたが、本シンポジウムは研究科全体を挙げてのプロジェクトの成果報告の場です。このプロジェクトは教育学研究科にとっていくつかの点で非常に意義深いものです。

第一に研究科の半数を超える教員が参加しています。本日の資料としてカリキュラム案が配付さ

れていますが、そこには哲学教育、バリアフリー教育、それから図書館を利用した探究型学習など非常に幅広い領域のカリキュラム案が含まれています。これは教育学研究科の教員の専門領域の広がりやを反映しているとともに、この幅広い領域のメンバーがこぞってこのプロジェクトに参加していることの表れです。

第二に、附属中等教育学校からもほとんどの教員が参加し、研究科の教員と一体となって研究プロジェクトを進めてきた点が挙げられます。私は他大学の附属学校の状況は詳しく把握していませんが、このような大規模な研究協力体制が組まれているところは多くないと思います。

そして第三に、いま申し上げた附属学校の参加とも関係しますが、今回のカリキュラム案は、実際の教育実践を踏まえて具体的な提案をしていくことを志向して作られたということも意義の一つです。研究科の教員間には専門の研究内容や採用する研究方法の違いがあり、また、教育実践に比較的近い者もいれば、そうでない者もいます。しかし、このプロジェクト全体として、実践に根ざした提案をしていくことを共通の目標として掲げたことは大きな意味があると考えています。

そういったことの結果として、本日のシンポジウムがあります。今日のテーマは「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション」ということですが、その提案の有用性を問うことは、そのまま、私たち教育学研究科の研究自体が社会に生きる教育学研究となっているかどうかという問いにもつながると考えています。参加者の皆さまには、そういう観点からも忌憚のないご意見を頂ければと思います。本日はどうぞよろしくお願ひします。

話題提供 1

「基幹学習ユニットからの提案—既存の教科内容を生かして新しい学びを—」

市川 伸一

(教育心理学コース)

私からは、四つのユニットの一つである基幹学習ユニットからの提案についてお話します。副題の「既存の教科内容を生かして」とは、全く新しい内容を提案するということではなく、これまでの教科内容を生かしつつ、それを再構成し、再組織化することで、社会にも生きてくるような新しい学びにしていこうということです。そうした発想を基に、このユニットは成り立っています。

基幹学習ユニットのテーマ

- 基幹学習とは

従来のカリキュラムで中心的な存在であった国語、社会、数学、理科、外国語、といった教科内容的な学習内容そのものは、そのまま社会で使われる知識・技能とはならないものも多い。

生徒としても、テストのための勉強になりがち。

どのようにして、生徒にも「意義あるもの」にするか

図 1

本ユニットのテーマである基幹学習とは、従来のカリキュラムでも中心的な存在であった、国語、社会、数学、理科、外国語などの教科内容的な学習のことです(図 1)。これらの内容自体は、そのまま社会で使われる知識や技能にはならないものも多く、中学・高校になると、内容が非常に専門的かつ高度になってきます。果たしてこれは自分が大人になったときに使うのだろうか、自分の両親のことを考えてみても、別に仕事でも生活でも特に使っているわけでもない、そういった内容が増えてきます。生徒にしてみると、一体何のためにこんなに難しいことを学ばなければいけないのだろうと思ってしまいます。目の前には学校での教科の学習時間が必修としてあり、そして、テストもあれば受験もあります。そのため